令和5年度　福岡県ノーリフティングケア普及促進事業

4期生　新規取組施設

令和5年6月からマネジメント研修及び基本技術研修スタート
令和5年12月末の施設の現状調査の結果

施設名　福岡地域	社会福祉法人　　学而会 特別養護老人ホーム　サンシャインプラザ
入所定員	定員　110名　+ショートスティ　　10　床
平均要介護度（12月末）	3.2　⇒　3.5
介護職員数（12月末）	63名　⇒63名　　内訳　男性　　19名、女性　　44名　　平均年齢　　45.0　歳 介護職員以外の職員数　　24　名（看護職　9名　リハ職　　1名　事務職　5名　その他　9名） （12月） 63名　⇒内訳　男性　　20名、女性　　43名　　平均年齢　　45.6　歳 介護職員以外の職員数　　22　名（看護職　7名　リハ職　　1名　事務職　5名　その他　9名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：110台（うち電動ベッド110台，手動ベッド0台） 車いす合計　83台：標準型車いす（33台），跳ね上げ式車いす（26台）， リクライニング車いす（6台），　ティルト・リクライニング車いす（18台） スライディングシート：2枚　⇒4枚 スライディングボード：8枚　⇒9枚 フレックスボード含む スライディンググローブ：2組⇒2組 リフト：0台　⇒　0台（購入検討中）　　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	スライディングボードを使用しているユニットはあったが、全フロアでは使用しておらず、介助の方法も統一されていない。ノーリフティングケアの意識も全くなかった。多くのユニットは抱える介助を行っていた。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	75%　⇒　75% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

施設長を中心に目的を共有しマネジメント研修に参加されていました。新卒入職者が、「福祉用具は必要な物・良い物とわかっていながら現場で普及させれない」ことに悩んでいるということでしたが、教育体制・方法も工夫をしながら10ユニットでのノーリフティングケアの導入・定着に向けて、しっかりと取り組めていました。“職員の意識が変わってきた！”大きな成果だと思います。今後の変化が楽しみです。

施設名 福岡地域	医療法人　ひのき会 介護老人保健施設　ひのき
入所定員	定員　86名
平均要介護度（12月末）	3.2　⇒　3.4
介護職員数（12月末）	26名⇒21名　　内訳　男性１３名、女性　　８名　　平均年齢40.9歳 介護職員以外の職員数　　２４名　（看護職　９名　リハ職　６名　事務職　５名　その他　４名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：86台（うち電動ベッド86台，手動ベッド0台） 車いす合計　51台：標準型車いす（34台），跳ね上げ式車いす（7台）， リクライニング車いす（10台），　ティルト・リクライニング車いす（0台） スライディングシート：0枚　⇒　2枚 スライディングボード：0枚　⇒　2枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組 ⇒　1組 リフト：0台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	福祉用具の数量把握・メンテナンスはできているが、腰痛防止やノーリフティングケアの視点での導入の検討等はできていない状態であった。多くの介護職員が腰痛を抱えており、施設で取り組むべき課題となっていた。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	81%　⇒　90% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

マネジメント研修では、すべての委員が出席できない状況の中で、研修に参加しました。
計画に関しては、立案し実践することが困難な事もありましたが、できる事から少しずつ取り組みました。
先ずは福祉用具を整え、一歩一歩、ノーリフティングケアの取り組みを進めてほしいと思います。

施設名 福岡地域	社会医療法人　福西会 介護老人保健施設　ケアセンター　ひまわり苑
入所定員	定員　100名　+ショートステイ　空床利用
平均要介護度（12月末）	2.9　⇒3.0
介護職員数（12月末）	43名　⇒　　内訳　男性　16名、女性　　27名　　平均年齢　42.1歳 介護職員以外の職員数　39名　（看護職　12名　リハ職　7名　事務職　7名　その他　13名）
取り組み開始時期	令和5年1月から
開始当初の福祉用具環境	ベッド：100台（うち電動ベッド54台，手動ベッド46台） 車いす合計　80台：標準型車いす（13台），跳ね上げ式車いす（51台）， リクライニング車いす（1台），　ティルト・リクライニング車いす（15台） スライディングシート：2枚 ⇒ 4枚 スライディングボード：2枚　⇒　13枚（フレックスボード4枚　ラクラックス3枚） スライディンググローブ：0組　⇒　0組 リフト：0台⇒　0台　　スタンディングリフト：1台　レンタル
開始当初の職場環境	移乗介助はほとんどが抱え上げの状態が日常化しており、福祉用具を使用するという考えもなかったような環境。腰痛があるのが当たり前であったが、これまで腰痛アンケートなどは実施しておらず、把握していなかった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	63%　⇒　54% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

進捗状況の報告や計画を作成する中で職員の皆さんの技術研修に積極的に参加をされている状況が素晴らしかったです。また取り組みの中でも職員の意欲を引き出すように検討するなど、マネジメント研修の中でも委員会メンバーの活発な意見交換が見られ、ノーリフティングケアが事業所内に定着する日が近づいているのではないかと期待しています。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　さわら福祉会 特別養護老人ホーム　マナハウス
入所定員	定員　80名　+ショートスティ　11　床（80名の中に含む）
平均要介護度（12月末）	4.0　⇒3.95
介護職員数（12月末）	35名　⇒　35名　　内訳　男性１１名、女性　２４名　　平均年齢　36.7　歳 介護職員以外の職員数　１７名　（看護職　７名　リハ職　１名　事務職２名　その他　７名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：80台（うち電動ベッド79台，手動ベッド1台） 車いす合計　70台：標準型車いす（45台），跳ね上げ式車いす（10台）， リクライニング車いす（5台），　ティルト・リクライニング車いす（10台） スライディングシート：７枚　⇒13枚 スライディングボード：4枚　⇒5枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：６組　⇒8組 リフト：5台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	4年前にノーリフティング宣言をしており、必要な福祉用具も揃っていた。しかしながら特定の入居者にしか使用できておらず、定期的な研修も出来ておらず不良姿勢での介助が増え腰痛保持者が増加傾向にあった
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	63%　⇒　57% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

マネジメント研修で立てた計画を毎回しっかりと達成されていました。これまで取り組んできた事を活かしながら、もう一度初心に戻って職員研修等に取り組まれていました。定期的な研修などを通しノーリフティングケアが、今後施設内に定着することを期待しています。

施設名 福岡地域	株式会社　エス・エス・カンパニー 特定施設入居者生活介護　生の松原ハッピーガーデン
入所定員	定員　74名　　内、32床稼働
平均要介護度（12月末）	2.5⇒2.6
介護職員数（12月末）	14名⇒14名　　内訳　男性　3名、女性　11名　　平均年齢　51.8 歳 介護職員以外の職員数　10名　（看護職　8名　リハ職　1名　事務職　5名　その他　　名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：32台（うち電動ベッド32台，手動ベッド0台） 車いす合計　25台：標準型車いす（16台），跳ね上げ式車いす（4台）， リクライニング車いす（3台），　ティルト・リクライニング車いす（2台） スライディングシート：1枚　⇒　1枚 スライディングボード：1枚　⇒　1枚（フレックスボード含む） スライディンググローブ：0組　⇒　２セット リフト：0台　⇒　なし　　スタンディングリフト：なし⇒　なし
開始当初の職場環境	入居者数32名の内、約3分の2の方は一部介助、全介助を要す方となっています。そのような状況の中、2～3時間おきのケア、移動動作があり、職員に負担がある
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	86%　⇒　61% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

ＰＤＣＡサイクルを理解し、既存のマニュアルを活用するだけでなく、オリジナルの腰痛予防体操を作成するなど、この事業を浸透させるための心意気を、メンバーより感じることができました。きっと、「入居者ファースト・職員ファースト」が実現されることでしょう。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　白熊会 特別養護老人ホーム　白熊園
入所定員	定員　80名　+ショートスティ　29床
平均要介護度（12月末）	4.16　⇒　4.10
介護職員数（12月末）	45名　⇒　53名　内訳　男性　19名、女性　34名　　平均年齢　38.2歳 介護職員以外の職員数　57名　（看護職　11名　リハ職　1名　事務職　5名　その他　41名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：80台（うち電動ベッド79台，手動ベッド1台） 車いす合計　83台：標準型車いす（3台），跳ね上げ式車いす（58台）， リクライニング車いす（7台），　ティルト・リクライニング車いす（15台） スライディングシート：0枚　⇒15枚 スライディングボード：3枚　⇒フレックスボード含む5枚 スライディンググローブ：8組　⇒37組 リフト：0台⇒0台　　スタンディングリフト：なし⇒なし
開始当初の職場環境	ノーリフティングケアそのものを知らない職員が多く、抱え上げの介助が主流であった。移乗介助を軽減するためのフレックスボードを導入。ベッド上の移動に対してグローブの使用を勧めていたが十分な数の導入・研修が実施できておらず、定着ができていない状態であった。跳ね上げ式車椅子の跳ね上げを使っていなかったり、電動ベッドでも高さを調整しなかったりとそろっている機器の使用についてもうまく活用できていない状態であった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	51%　⇒　52% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

一致団結し創意工夫をもって、研修に参加された施設です。研修目標である『体制づくり』を達成すべく、わくわく楽しくなるような、オリジナルのポスターや意見箱を作成し、メンバーの意気込みが感じ取れました。
２年目への変化が楽しみです。

施設名 福岡地域	社会福祉法人　ひのき会 地域密着型　特別養護老人ホーム　陽だまり
入所定員	定員　29名　（ショートスティ　10床）
平均要介護度（12月末）	3.9　⇒　3.9　（12月末）
介護職員数（12月末）	22名⇒18名　内訳　男性　7名、女性　11名　　平均年齢　47歳 介護職員以外の職員数　11名　（看護職　3名　リハ職　1名　事務職　5名　その他　2名）
取り組み開始時期	2023年7月
開始当初の福祉用具環境	ベッド：39台（うち電動ベッド39台，手動ベッド0台） 車いす合計　29台：標準型車いす（10台⇒11台），跳ね上げ式車いす（4台）， リクライニング車いす（15台），　ティルト・リクライニング車いす（0台） スライディングシート：2枚⇒6枚 スライディングボード：1枚⇒2枚　　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組⇒3組 リフト：0台⇒0台　　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	スライディングボード等の福祉用具の使用・導入を検討している状態であった。腰痛予防やノーリフティングケアに関して取り組み方を検討している状態であった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	68%　⇒　47% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

誰のための研修参加なのかがはっきりわかるほど、参加の皆さんの前向きな姿勢を感じることができました。研修計画同様、今あるマニュアルを活用し、ノーリフティングケアが定着するよう、少しでも前へ進んでいただきたいと思います。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　無何有の郷 特別養護老人ホーム　　杜の家
入所定員	定員　100名（本館）
平均要介護度（12月末）	4.02（6月）　⇒ 4.05（12月）
介護職員数（12月末）	43名（本館のみ）　⇒　内訳　男性　10　名、女性　33　名　　平均年齢　43.5歳 介護職員以外の職員数　30名　（看護職12名　リハ職　2名　事務職　1名　その他　15名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：100台（うち電動ベッド100台） 車いす合計　102台：標準型車いす（42台），跳ね上げ式車いす（20台）， リクライニング車いす（30台），　ティルト・リクライニング車いす（10台） スライディングシート：1枚　⇒2枚 スライディングボード：5枚 スライディンググローブ：8組　⇒10組 リフト：2台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	入居者数が多いため、日々の業務をこなすことに精一杯で、福祉用具を使用するよりも抱え上げた方が「早い・楽」ということが日常化していた。人員不足により職員への教育がうまくできていない状況だった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	80%　⇒　78% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

北九州市八幡西区畑貯水池の麓の自然豊かな環境の中にある施設です。大規模な組織ながら丁寧に計画を進めて腰痛者を減少させる実績を上げたことが評価できます。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　みやこ老人ホーム ユニット型特別養護老人ホーム　　みやこの苑
入所定員	定員　50名　+ショートスティ　0　床
平均要介護度（12月末）	3.89　⇒3.9
介護職員数（12月末）	26名⇒　　内訳　男性　12　名、女性　　14　名　　平均年齢　41.3　歳 介護職員以外の職員数　　9　名（看護職　3名　リハ職　1名　事務職　2名　その他　3名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：50台（うち電動ベッド50台，手動ベッド0台） 車いす合計　55台→54台：標準型車いす（7台）⇒7台，跳ね上げ式車いす（30台）⇒30台， リクライニング車いす（5台）⇒3台，　ティルト・リクライニング車いす（15台）⇒14台 スライディングシート：10枚　⇒5枚 スライディングボード：9枚　⇒21枚　　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組　⇒24組（ディスポ） リフト：0台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	以前から跳ね上げ式車椅子やラクラックスなどの福祉用具は充実しており、活用している。 浴室の環境が悪いことやソファーからの移乗の負担が多いなど、抱え上げをしないと移乗が難しい環境である。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	69%　⇒　47% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

昭和30年に設立され、多くの事業を展開している同一法人内の1つが先行して本事業に取り組み、その影響を受け、今年度から新規に取り組み始めました。同一法人内で連携して、しっかりとノーリフティングケアの定着を目指してくれるでしょう。

施設名 北九州地域	有限会社　桃李 グループホーム　くもじ
入所定員	定員　18名
平均要介護度（12月末）	2.76　⇒2.15
介護職員数（12月末）	17名⇒18名　　内訳　男性　　名、女性　18名　　平均年齢　52.8歳 介護職員以外の職員数　　1名　（看護職　1名　リハ職　　名　事務職　　名　その他　　名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：18台（うち電動ベッド6台，手動ベッド0台） 車いす合計　17台　⇒19台：標準型車いす（16台），跳ね上げ式車いす（0台）⇒２台， リクライニング車いす（0台），　ティルト・リクライニング車いす（0台）⇒１台 スライディングシート：0枚　⇒3枚 スライディングボード：0枚　⇒１枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組　⇒ディスポ１箱 リフト：0台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	福祉用具も全くなく、車椅子も標準型のみ。ベッドを６台のみ電動型にやっと変更した状況だった。ノーリフティングと言うケアがある事も知らず、抱え上げる介護が常態化していた。スタッフの平均年齢も高く、腰痛保持者も多かった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	76%　⇒　88% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

小規模だからこそチームワークが良く、計画に沿って遂行できました。福祉用具は充分とはいえない状況の中、働き方改革として腰痛予防に取り組めた半年間でした。

施設名 北九州地域	社会福祉法人　なのみ一枝会 特別養護老人ホーム　垣生の里
入所定員	定員　70名　+ショートスティ　10床
平均要介護度（12月末）	3.9　⇒　4.0
介護職員数（12月末）	26名　⇒　　25名　内訳　男性　7名、女性　　18名　　平均年齢　44歳 介護職員以外の職員数　　14名　（看護職　9名　リハ職　1名　事務職　1名　その他　3名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：72台（うち電動ベッド72台，手動ベッド0台） 車いす合計　71台：標準型車いす（51台），跳ね上げ式車いす（7台）， リクライニング車いす（11台），　ティルト・リクライニング車いす（2台） スライディングシート：0枚　⇒　2枚 スライディングボード：6枚⇒　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組⇒　2組 リフト：2台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	腰痛を訴える職員が多く、福祉用具は使用している職員、使用していない職員とバラバラであり、使用方法にもバラつきがあり、統一した使用は行われていなかった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	65%　⇒　68% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

平成26年に設立された比較的に若いユニット型の施設です。少ない職員ですが、工夫をしながら本事業に取り組み、計画実行率を高めることができた半年間となりました。継続することにより、さらに期待できるでしょう。

施設名 筑豊地域	社会福祉法人　飯塚市社会福祉協議会 特別養護老人ホーム　　筑穂桜の園
入所定員	定員　30名　+　ショートスティ　3名
平均要介護度（12月末）	4.29　⇒　4.0
介護職員数（12月末）	17名　⇒　17名　　内訳　男性　　5名、女性　　12名　　平均年齢　　49.05歳 介護職員以外の職員数　　10名　（看護職　3名　リハ職　0名　事務職　1名　その他　　5名）
取り組み開始時期	平成30年頃から開始しました。
開始当初の福祉用具環境	ベッド：33台（うち電動ベッド33台） 車いす合計　33台⇒36台+個人用4台：標準型車いす（5台⇒4台），跳ね上げ式車いす（18台⇒17台）， リクライニング車いす（5台⇒6台），　ティルト・リクライニング車いす（9台⇒13台） スライディングシート：8枚　⇒　12枚 スライディングボード：11枚　　フレックスボード含む スライディンググローブ：9組 リフト（浴室用含む）：4台　　スタンディングリフト：3台
開始当初の職場環境	5年ほど前からノーリフティングケアへの取り組みを行いはじめました。職員はノーリフティングケアを行うことには抵抗なく協力してもらっています。リフトの購入を計画的に行っていき、ようやくリフト2台・スタンディングリフト3台を購入することが出来ました。その他の福祉用具も徐々に揃えているところです。令和3年度にはノーリフティングケア委員会を立ち上げて、ボードやシートの使用の仕方をSNSの動画配信や研修で学んだことを伝達しています。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	41%　⇒　30% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

独自にノーリフティングケアへ取り組まれており、既に抱え上げによる介護からの脱却に成功されています！今回マネジメントを基礎から学ぶことで、未整備であったリスク把握方法の確立やより安全なケア技術の教育など、さらに踏み込んだ体制づくりを進めています。

施設名 筑後地域	医療法人　清友会 介護老人保健施設　クリーンパル・ゆう
入所定員	定員　100名　+ショートスティ（空床利用）
平均要介護度（12月末）	2.80　⇒　2.79
介護職員数（12月末）	29名　　内訳　男性　9名、女性　20名　　平均年齢　　43.2歳 介護職員以外の職員数　　22名　（看護職　14名　リハ職　5名　事務職　2名　その他　1名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：100台⇒99台（うち電動ベッド25台，手動ベッド75台⇒74台） 車いす合計　72台：標準型車いす（38台），跳ね上げ式車いす（27台）， リクライニング車いす（2台），　ティルト・リクライニング車いす（5台） スライディングシート：3枚 スライディングボード：8枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組　⇒ディスポグローブ1箱（50枚入り） リフト：2台　　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	１年ほど前からノーリフティングケアやボディメカニクスについての研修などを取り入れていたが、ほとんど実践はできていなかった。リフトは２台導入しており、活用出来ていたがスライディングボードやシートはほとんど使えていなかった。身体的負担で悩む職員が多く、腰痛保持者も多い状況であった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	68%　⇒　62% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

先行して取り組まれている特別養護老人ホーム桜の丘と同一系列の施設です。筑後で開催された「ノーリフティングケアフェス」で刺激を受けた現場職員の声でスタートしています。
取り組みを通じて「変わること」を恐れなくなり、業務改善しやすい風土が出来始めています！

施設名 筑後地域	社会福祉法人　はぜの実会 特別養護老人ホーム　　紅葉樹
入所定員	定員　80名　+ショートステイ　7床
平均要介護度（12月末）	3.98　⇒　3.92
介護職員数（12月末）	45名　⇒　　内訳　男性　24　名、女性　　21　名　　平均年齢　　44　歳 介護職員以外の職員数　　12名　（看護職　5名　リハ職　1名　事務職　4名　その他　2名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：87台（ 電動ベッド87 台，手動ベッド 0 台 ） 車いす合計　75 台 ⇒　83 台 標準型車いす 4 台　　モジュール型車いす 57 台 ⇒ 62 台 ティルト・リクライニング車いす 14 台 ⇒ 17 台 スライディングシート　：0 枚 ⇒ 10 枚 スライディングボード　：0 枚 ⇒ 13 枚（フレックスボード含む） スライディンググローブ：0 個 ⇒ ディスポ1箱（50 枚） リフト：0台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	福祉用具の使用は全くなく、一人での移乗が基本で全介助の方に対しては二人介助にて行っていた。内出血や皮膚剥離も度々生じていた。ノーリフティングケアについての教育は行っていない状態であった。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	53%　⇒　58% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

できるところから一つ一つ業務改善し、ノーリフティングケアの浸透に向けて着実に歩みを進めています。特に環境整備では効果が実感しやすいところへ確実に切り込み、内容も創意工夫が窺えました。
福祉用具ケアもスタートし、今後の取り組みが期待される施設です！

施設名 筑後地域	社会福祉法人　けんこう 介護老人福祉施設　美さと
入所定員	定員　50名　+ショートステイ　10　床
平均要介護度（12月末）	3.9　⇒　3.8
介護職員数（12月末）	27名　⇒　29名　　内訳　男性　6　名、女性　　21　⇒　　23　名　　平均年齢　　44　歳 介護職員以外の職員数　9　⇒　11　名　（看護職　4　⇒　5　名　リハ職　2　名　事務職　2　⇒　3　名　その他　1　名）
取り組み開始時期	本事業のスタートから
開始当初の福祉用具環境	ベッド：63台（うち電動ベッド63台，手動ベッド0台） 車いす合計　66台：標準型車いす（40台），跳ね上げ式車いす（8台）， 　　リクライニング車いす（11台），　ティルト・リクライニング車いす（7台） スライディングシート：2枚　⇒　4枚 スライディングボード：0枚　フレックスボード含む スライディンググローブ：0組　⇒　6組 リフト：2台　スタンディングリフト：なし
開始当初の職場環境	以前から電動ベッドやリフト等の導入はあるものの、適切な使用や活用が出来ていなかった。介助時も抱え上げ・持ち上げ・引きずったりとノーリフティングケアの意識はなかった。その為腰痛持ちが多く、腰痛＝職業病で、仕方がないと思うような環境が出来ていた。以前から、スライドボード等の外部研修を受けるも、自施設には環境が整っていない等あり諦めている所があった。今回も「研修を受けても難しいのではないか」とメンバー間で思っていた。
腰痛者の割合6月／12月 常に痛い・時々痛い人	78%　⇒　67% 腰痛者の詳細や抱え上げ介護の実情などは、別紙集計結果を参照ください。

モデル施設の効果的な取り組みや成功事例を学び、積極的に取り入れることでノーリフティングケアの浸透を目指しています。
腰痛者の割合が高く大きな課題となっていますが、すでに少しずつ目に見える効果が出てきています。今後さらなる成長が見込まれます！